

野鳥 会報

No.75 2013年 3月発行

日本野鳥の会新潟県

鳥のいる風景 オジロビタキ *Ficedula parva* ヒタキ科



桜の開花とともに鳥屋野潟の春が始まる。満開の桜花に訪れるメジロの群れは、チーチーとにぎやかに鳴きながら花の蜜を吸い、ヒヨドリの嘴は花粉で黄色に染まる。花が散り始めると、桜の木に発生する青虫や飛翔性の昆虫を狙ってオオルリ、キビタキなどのヒタキ類が次々と立ち寄っていく。渡り途中の立ち寄りのためか、エネルギー補給としての捕食行動は多く観察するが、囀る姿を見かけることはあまりない。

2012年4月27日の朝、公園の桜の枝に止まるヒタキを見つけた。キビタキの若鳥やムギマキに似た羽色をしているが、尾の付け根の白色の羽毛とオレンジ色の喉が良く目立つ。オジロビタキの雄であった。さかんに喉を膨らませて鳴いている。膨らんだ喉に朝の陽ざしが当たるとオレンジ色は一層輝きを増し、膨らみが収まると反射も収まる。繰り返して鳴く様子はまるで喉が明滅しているかのようで、初めて見る姿にしばらくの間見入った。その後林床部に飛び降りるようにして餌を捕り、別の枝に止まってまた囀りを繰り返しながら公園の森をゆっくりと移動していった。一瞬の出会いに感謝して長旅の無事を祈りながら、繁殖地での配偶行動に思いを馳せた。

(岡田成弘)

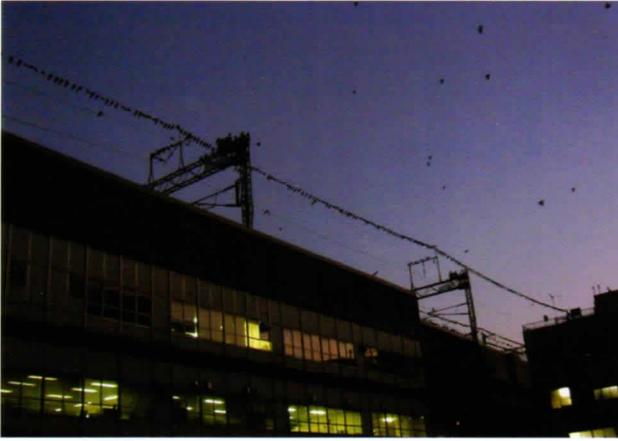


図 2. 新幹線の架線脇の送電線に止まる群れ



図 3. この後建物内の在来線の架線に移動する。



図 4. 駅前の市街地電線に止まるミヤマガラス



図 5. 駅前駐車場のケヤキに止まるカラス

調査結果と考察

1. 塙の概要とカラスの種類

カラスが塙にしているのは JR 長岡駅ビルを中心としたエリアである。夜間カラスが止まっている場所は、駅前に植栽されたヒマラヤシダ数十本と 1 本のケヤキの大木、駅前エリアにそれぞれ隣接する市街地の電線、そして駅構内の新幹線、在来線の架線や送電線などである (図 2～図 5)。その止まっている場所を見ると、上下線とも建物外の架線や送電線に多いが、建物内部の送電線やホーム端の天井梁に止まっているのも確認された。

就塙するカラスの種類は、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ミヤマガラスの 3 種で、就塙個体数は数えていないが目視する限りハシボソガラスが最も多い。

ミヤマガラスは 12 月の調査時から確認され、2006 年 12 月に数えた時には約 200～300 羽が確認された。なお、この塙は周年にわたって就塙が見られる周年塙である。

2. 時期別の塙入り個体数

長岡駅の塙に向かうカラスの塙入り個体数は時

期別に変動し、10 月から 2 月までの冬期間に多く、最も多かったのは 12 月で 9,542 羽がカウントされた (図 6)。同じ周年塙である上越市の調査でも 12 月に最大値 (18,054 羽) を示している (中村 2008)。このように冬期に就塙個体数が増加するのは、各地の調査事例でも同様で、これはハシボソガラス、ハシブトガラスの集結個体数が冬期に増加することによると思われるが、同時に当該調査地ではミヤマガラスが渡来して塙を共有することも増加の一因であろう。12 月の個体数は 2 月までほぼ維持されたが、4 月に入ると一気に 513 羽にまで減少した。このような 3 月、4 月からの就塙個体数の減少は、上越市をはじめ各地の周年塙の調査でも共通する現象で、これは

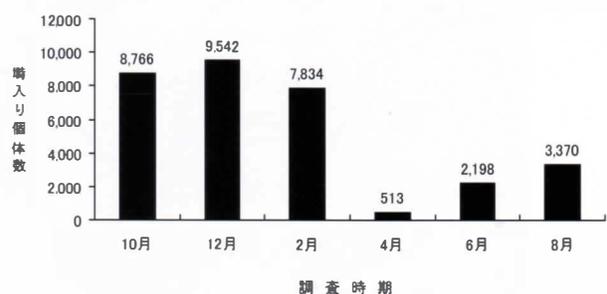


図 6. 時期別塙入り個体数

3月に入って、ハシボソガラス、ハシブトガラスが繁殖期を迎え、繁殖個体がそれぞれ縄張り内に塒をとるようになること、またミヤマガラスが北への渡りを迎えて渡去すること、などが要因と考えられる。繁殖期に塒を利用している個体は、前年生まれのまだ繁殖年齢に達していない若い個体であることが上越教育大学の調査で明らかにされている(中村 2008)。長岡駅の塒では繁殖期が終了すると再び塒入りする個体が増え始め、8月の調査では3,000羽を超すようになった。

3. 各調査地点における塒入り個体数

まず、東地域と西地域からの塒入り個体数をみると、通年の合計飛来数は東地域が西地域を上回った。これは個体数が多くなる10月、12月、2月の塒入り個体数が西地域より東地域で多いからである。そして、塒入り個体数が少なくなる4月、6月、8月には、各月とも少ないながらも東地域よりも西地域からの個体数が多いことが分かった(図7)。

次に各調査地点を通過して塒入りする個体数をみると(図8)、東地域では東3(四郎丸)、東4(永田町)、東5で個体数が多く、10月、12月、2

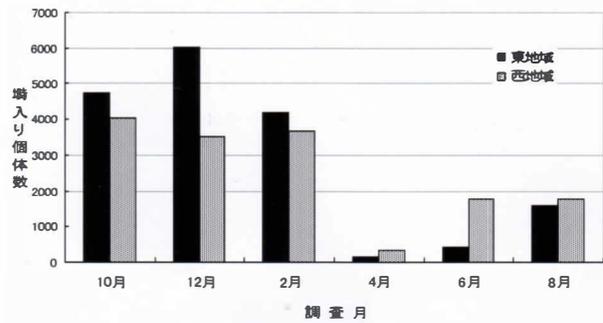


図7. 東地域と西地域の調査地点からの時期別塒入り個体数

月にこの3地点を通過して塒入りする個体数は東調査地点全体の85.6%になる。つまり、東地域は長岡の北東方面に広がる水田地帯から塒入りする個体数が圧倒的に多いことが分かった。一方南東方面の東山山麓の水田地帯を控える、東1(片田)、東2(上条)の塒入り個体数は各調査月とも少ないことがわかった(図8)。そして西地域の各調査地点の塒入り個体数は冬期と夏期で若干違いがみられ、冬期は西3(長生橋~大手大橋)と西4(大手大橋~長岡大橋間)を通過して塒に向かう個体数が圧倒的に多いのに対して、4月からは西5(長岡大橋~蔵王橋間)と西6(蔵王橋~下流)の北西方面に広がる水田地帯からの飛来

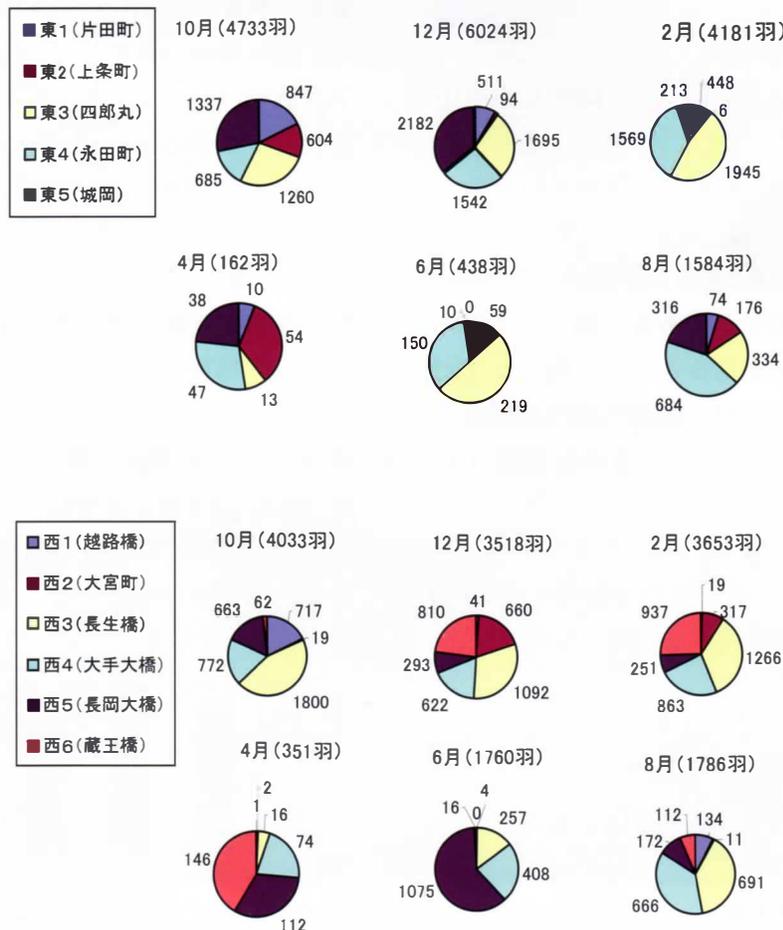


図8. 時期別の各調査地点の塒入り個体数



図-2 初夏の飯豊山地
飯豊連峰の最高峰、大日岳に続く稜線（残雪か所は雪崩地形と低木林、丈高草原になる）



図-3 山地から低山帯の景観
山地から低山にかけては、褶曲した谷地形や雪崩地形、断崖岩場などが存在して変化に富んでいる



図-4 上空を旋回するイヌワシ成鳥♂
飛行高度は山の稜線より高い場合が多いが、時には山腹に沿った林道の上空を滑翔することもある

4. 生活サイクル

イヌワシは留鳥として周年当該地域で生息している。上空を滑翔・帆翔する個体を観察する機会が多く、時に谷を見下ろす枯れ木の横枝に止まる個体や、住宅地に近い岩塊に止まる個体も観察される。これまでの調査報告と同様に、本山域では晩秋の11月頃からディスプレイ飛行などが観察される。この頃から巣材運びも目撃されるが、一連の行動は雨や雪の降る日よりも晴天の日が多い。



図-5 山の稜線を飛ぶ
イヌワシはこんな所に、このように出現する



図-6 上空を巡回するペア
晩秋から初冬の頃に♂と♀が巡回しながら営巣地上空を飛ぶ

5. 繁殖場所

営巣地の方角はいずれも北東～東である。営巣場所は、断崖岩場で岩がオーバーハング（岩穴になっている）しており、雪や雨が直接あたらないようになっている。



図-7 イヌワシ繁殖地の一例
オーバーハングした営巣地は降雪や雨などがあたらない場所である



図-8 巣に飛来した成鳥♀
ヒナの成長に伴い♂と♀が交互に餌を運ぶようになる

6. 狩り場と餌動物

イヌワシのハンティング場所は雪崩崩壊地や断

崖岩場、開けた斜面、林道、伐採跡地などの空けた空間の所が多い。狩りの対象となる獲物はノウサギ、タヌキ、キツネ、テン、ヤマドリ、ヘビ類であるが、冬期（12～4月）はノウサギとヤマドリの捕食が多く、夏期（5～9月）になると、ヘビ類の比率が高くなる。イヌワシ（平均体重4kg）が生活していくには1日あたり107.5g（乾燥重量）の餌が必要であり、1年に必要な餌量は39kgである（由井、1988）。ノウサギを例にした場合、次のように計算される。ノウサギの平均体重は1.5kg（含水率75%）であるが、全体の1/3は毛、骨などの非摂食部である。これを差し引いた可食部の重量は250g（乾燥重量）になる。従って、イヌワシ1個体が食するノウサギの数量は1年間に156頭ということになる（ $39237.5g \div 250g = 156$ 頭）



図-9 狩り場の一例
積雪豊富な斜面は視界が利いて餌動物が発見しやすい場となる



図-10 獲物を探しながら飛翔する♂成鳥
伐開地や林道の上空では、さらに高度を下げて巡回する

7. 引用文献

- 1) 環境省(2012)：猛禽類保護の進め方（改訂版）
- 2) 由井正敏(1988)：森に棲む野鳥の生態学，創文社

数が多くなっている。そして、長生橋上流の南西方向に当たる西山丘陵山麓から、西1(越路橋上流)、西2(大宮)を通過して埜に向かう個体数は、東地域の東1、東2地点と同様に少ないことが分かった。

3. 冬期の就埜個体数と旧長岡市地域の生息個体数

カラスの集団埜が形成される場所は、他の地域の事例を見ても神社境内や都市公園(例えば東京明治神宮など)、あるいは大学構内などの樹林が多い。長岡市でも長岡駅構内に埜が形成される前は、神社境内の大きなケヤキ数本が埜であった。従って、市街地のビルに囲まれた駅ビル構内が埜になっているような例は他にあまり無いことかも知れない。今回の調査によって長岡駅埜の個体数は、12月には9,542羽を数えた。しかしこの個体数の中には、各調査地点の内側、つまり駅周辺の市街地に調査時間前に入った個体や日中市街中心部で生活していたカラスなどは含まれていない事になる。それらの事も考慮すると冬期の就埜個体数は凡そ10,000羽になるかも知れない。しかしこの個体数がそのまま長岡市地域に生息しているカラスの個体数にはならない。この埜調査と併行して行なった、旧長岡市地域のカラスの営巣数調査では、ハシボソガラスとハシブトガラス合わせて466巣(番)が確認されている(長岡野鳥の会20012)。この番数から長岡市地域のカラスの個体数を推定すると、1番当り平均2.5羽の雛が巣立たと仮定し、親と巣立ち雛数で2097羽、それに繁殖に加わらない前年生まれの若いカラスの個体数が4月の埜入り個体数からとると約500羽、全て合わせて約2,600羽である。当然調査もれの数や生存率なども関係するが、大雑把に旧長岡市地域のカラスの生息個体数を推定すると2,700羽~3,000羽である。とすれば、冬期の長岡駅埜に集結する約10,000羽のカラスは、日本では繁殖しないミヤマガラスが加わるとしても、推定生息個体数の3倍を超えることになる。冬期の埜には長岡市地域以外の相当広い地域からのカラスが加わっていることが想定される。

要 約

- 1) JR長岡駅構内のカラスの集団埜を2006年10月から2007年8月まで隔月で6回調査した。
- 2) この埜は、ハシボソガラス、ハシブトガラス、

ミヤマガラスの3種が就埜する、周年埜であった。
3) 就埜個体数は、冬期に多くなり、10月(8,766羽)、12月(9,542羽)、2月(7,834羽)であった。一方繁殖期の4月には513羽に減少し、繁殖が終了した8月には再び3,370羽と増加が始まった。

4) 埜を中心に四方11調査地点で就埜個体数をカウントしたところ、埜の北東並びに北西方面の広い水田地帯からの飛来が多いことが分かった。

5) 長岡市地域のカラス(ハシボソガラス、ハシブトガラス)の営巣数の調査から推定されるカラスの個体数を2,700羽から3,000羽と推定すると、冬期の埜には長岡市地域外の相当広い地域から集まったカラスが加わっていることが想定された。

文 献

- 山岸哲 1962 カラスの就埜行動について。第1報 長野県下での秋冬の埜について。鳥類の生活史。羽田健三編著。
- 倉田篤・樋口行雄 1972 三重県におけるカラス科2種の就埜行動。山階鳥研報6:87-106。
- 唐沢孝一 1986 首都圏でのカラスの集団埜調査報告。都市鳥研究会。62~66。
- ねぐら研究会 1986 神奈川県内におけるカラス類の集団埜について。Strix5:17-22。
- 中村雅彦 2008 上越のカラスは日本一。雪国上越の鳥を見つめて。上越鳥の会編著。
- 長岡野鳥の会 2012 合併前の旧長岡市におけるカラス類2種の営巣調査。日本野鳥の会新潟県会報74:2-7。

調査を担当した長岡野鳥の会会員

髙尾功 五十嵐伸吾 五十嵐正義 井口忠 池野宏子 内田幸男 大島基 大塚幸男 長部宏芳 加藤四郎 樺沢幸子 小林きよ 小林茂樹 小林淳一 佐藤和男 佐藤三重子 澤村恵 篠田直道 鈴木淳悦 高野順子 竹田悌次郎 竹田文子 田崎由美子 田中京子 塚越雍英 土田智子 戸川辰夫 中村元子 長谷川誠 早川一男 早瀬キミ子 広川潔 古川英夫 細川章子 山岸太 横山美津子 吉成哲 渡辺恵美子 渡辺恒夫 渡辺央。

飯豊山地山麓に生息するイヌワシの生態

阿賀町 渡部 通

1. はじめに

イヌワシ (*Aquila chrysaetos*) は日本に生息する山ワシ最大の大型猛禽であり、山地森林生態系の頂点に位置している。翼を広げると2m前後にもなり、ノウサギやタヌキ、キツネ、テンなど中型の哺乳類やヤマドリなどの鳥類、ヘビなどの爬虫類などを主な食物として生息している。日本におけるイヌワシの個体数は少なく、絶滅危惧種 I B 類 (近い将来において、野生での絶滅の危険性が高いもの) にランクされている。全国での推定個体数は約650羽とみられる (環境省、2012)。昭和40年 (1965) に国の天然記念物に指定。

2. 日本国内と新潟県内の分布

留鳥として北海道、本州、四国、九州に分布しているが、本州の東北地方及び中部地方から北陸地方にかけての日本海側の地域を中心に生息しており、四国、九州では局所的にごくわずかしか生息していない (環境省、2012)。新潟県内の主な

生息域は、内陸部の山岳地帯 (新潟、山形、福島、群馬、長野、富山の各県境の山域) であるが、ごく一部では人里に近い場所にも生息している。

3. 生息環境

私の調査地である東蒲原郡の山域は、飯豊連峰の南～南西に広がる地域である。冬期は魚沼地方と同じように降・積雪量が多い。当然ながら高海拔の飯豊連峰は積雪量が多く、さらに季節風の吹走などとも重なって特異な環境である。標高1,500m付近から主稜線にかけては、低木と高山植生の分布が顕著であり、標高1,500m付近から600m付近はブナ林が広がり、それより下部の低山帯ではコナラ・ミズナラを主体としたスギ植林地が多い。いずれの区域も崩壊地や断崖岩場箇所が多く、イヌワシの生息条件に大きな影響を与えている。



図-1 イヌワシの生息環境
広く低山帯 (里山の環境) から山地帯、さらに高山帯の景観が展開している

「日本野鳥の会柳生会長から大島前支部長に感謝状が授与されました」



昭和55年から平成22年まで30年間新潟県支部支部長をつとめられた大島基前支部長に、日本野鳥の会柳生会長から感謝状が授与されました。

大島前支部長は全国で最も長い期間支部長として、会の発展と野鳥の保護に大きな貢献をされたことからこのたびの表彰となり、3月3日に開催された日本野鳥の会新潟県役員会において石部会長より授与されました。

(事務局)



ツオトツルバム



珍鳥ノハラツグミ H24年1月8日 上越市清里区
発見・撮影者 岡庭 永一



雪の中にいた夏鳥のクロツグミ H25年1月17日 長岡市長峰町
撮影者:大島 基



ナベヅル成鳥2羽 発見者 花岡公貴 H24年11月5日 頸城平野(湯田)
撮影者 古川 弘 (動画から取り出し)



H25年冬(2月)80羽を超えるハクガンの群が頸城平野を舞っていました。(編集部)

寺泊探鳥会

H25年2月3日

当日は曇りで、西風が強く荒波を避けて港内に避難する鳥が多く、絶好の条件でした。

寺泊港では、スズガモ、ウミアイサがそれぞれ7～8羽の群れを作り、ヒメウ1羽が間近に観察できました。

またカンムリカイツブリ、ハジロカイツブリ、ミミカイツブリがそれぞれ単独で採餌していました。

出雲崎海岸ではシノリガモ雄2羽と雌1羽の群れを観察できました。

そのほかにハジロカイツブリ、ウミウ、ハマシギ、イソヒヨドリなど合計25種に出会いました。

(事務局)



出雲崎港にて



イソヒヨドリ♂



寺泊港にて



シノリガモ♀



出雲崎港カモメの群れ



ウミネコ

新潟県野鳥観察図鑑 vol.3

コミミズク (*Asio flammeus*) 英名 Short-eared Owl

1. 生息時期と生息場所

平野部を中心とする県内各地に10月頃北方から渡来し、春先まで生息する。積雪量が極めて多い年の厳冬期は観察例が少なくなる。

稲刈り後の二番穂が茂る広い水田、河川敷などに生息し、畔や休耕田などの枯れ草の中にねぐらをとる。外敵などの影響により日中飛ぶ姿を見かけることもあるが、主に夕方から夜間にかけて、ネズミなどを求めて開けた農耕地や草地の上を飛びまわる。杭や作業小屋など獲物を探ることができる場所に止まっていることもある。



2. 厳冬期のねぐら

雪が降り積もると草地のねぐらから農耕地周辺の低木に移り、数羽が集まってねぐらをとることがある。厳冬期には農耕地にある集落内のトラフズクの集団ねぐら脇に入り込むことがあり、人家の玄関近くでトラフズクとともにねぐらをとった例もある。

3. 観察方法

晩秋の晴れた日の夕方、広く見渡せる農耕地で口径の大きい双眼鏡で観察するとねぐらを出てフワフワと飛ぶ姿を見つけることができる。うっすらと雪が積もっているとさらに見つけやすい。また日中にコミミズクが止まりそうな杭などの周辺を調べ、ペリットを見つけておくと出会える確率が高くなる。夜間の観察には大型のライトが必要である。

4. 参考文献

・新潟県鳥類目録 日本野鳥の会新潟県支部編
(写真・解説 岡田成弘)

発行 2013年3月31日 No.75
発行人 石部 久 編集者 小林成光、浦部良雄、千葉 晃
事務局 〒950-0941 新潟市中央区女池3丁目13番25号
TEL 025-285-2405 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002